

第V章 総括

第1節 近世富山城外堀最下層出土遺物について

今回の調査では、絵図で確認できる近世富山城外堀SD04の調査を行い、堀底まで完掘した。堀底の構造は、城内側となる北が深く、城外側の南が浅いテラス状を呈している（第52図）。外堀の構造と変遷については次節で詳述する。ここではまず、堀が構築されてから機能していた江戸時代、特に17世紀に堆積したと推定される埋土から出土した遺物について、その種類や時期、数量、出土位置から読み取れる相違点についてまとめてることで、当時の状況を考察する。

埋土の珪藻分析から、河川氾濫の際に堆積した埋土の可能性があるものの、河川の影響が確認できた。このことから、藩政期（中層下部埋土：第60図）には、富山城外堀が富山城北側を流れていた神通川とつながる時期があったと考えられる（第IV章第1節）。また中層埋土は、期間を通して各層の性質に大きな違いがないこと、藩政期の遺物がほとんど出土せず、出土した遺物の大半が明治時代以降のものであった。以上のことから、下層、特に最下層から出土する遺物についてのみ比較検討を行った。

第52図は、第13・14図の埋土堆積状況を簡略化したもので、①～⑤の各層位から出土した遺物を第53図にまとめた。また埋土①、②③、④、⑤には堆積状況及び土質に明確な違いを確認したことから、北側出土遺物は最下層 i（①）と上層部分 ii（②③）に分け、南側テラス底面と同じレベルより上については、南側の一部を含む下層埋土から出土した遺物を iii（④）、堀全体の最下層埋土から出土したものを iv（⑤）と分類した。なお、ivには上層の混入遺物が含まれる。また、北側に堆積した埋土の時期を前期、南側を含めた時期を後期とし、時期分類の区分として利用した。

1 確認の方法

現地調査における遺物取り上げの際、遺物の出土した地点を可能な限りトータルステーションにより座標と深度を記録した。同時に、取上げ地点毎の埋土種類と堆積状況の誤差を減らすため、遺物が出土した土層の埋土種類をラベルに記録した。遺物の出土した層位・埋土種類による変遷を確認するために、未実測遺物を含めて点数を深度順に確認し、下層埋土の層位深度毎にまとめたものが第9表である。また、埋土断面観察の結果（第52図）にあわせ、出土した深度と土質で分類した地点を平面図に落としたものが第54～57図である。

2 出土遺物の種類と数量

遺物の時期の変遷を確認するため、一定量出土した土器陶磁器、編年が確立している物を中心に下記a～fとして抽出した。また、その他として特徴的な遺物もgとして併記する一方で、取上げ時に混入したと考えられる新しい遺物は除外としたものもある。

今回比較検討の為に抽出した遺物は、a：中近世土師器、b：越中瀬戸（b-1：施釉・b-2：素焼）、c：瀬戸美濃、d：唐津、e：伊万里、f：中国製陶磁器、g：その他特徴的な遺物、として表1にまとめた。なお、文中（i：_点、ii：_点）と記載したものは、各層で出土した実測点数である。

当該時期の遺物のうち、中近世土師器の変遷については富山市教育委員会の編年案を基本として考察した。また越中瀬戸・肥前系陶磁器等については、後述する引用・参考文献の編年を参考にした。

a：中近世土師器

a～cの在地産と、dの搬入品に分類できる。実測遺物59点中、最下層出土が確実なものは51点である。

下記a～cの3つの系統に分類できる。全て非口クロ成形である。

a類（i：4点、ii：11点、iii：2点）：平底。体部外反。口縁端部は摘み上げる。端部の調整に編年上の細分あり。口径は主に11～12cm前後と9～10cm前後の2種。

b類(ii : 6点、iii : 2点)：丸底。体部は外反と直線の2種。口縁端部も摘み上げるものと丸くおさめるものの2種。口径は主に11~12cm前後。

c類：平底(i : 3点、ii : 12点、iii : 8点)。体部は直線または内湾気味。口縁端部も摘み上げるものと丸くおさめるものの2種。ほとんどのものが口径9~12cm。

d類：搬入品(i : 1点、ii : 1点)。平底。底部・体部間に明瞭な稜をもつ。口縁端部は摘み上げるものと薄く仕上げるものの2種。口径14cm前後で大型。金沢城の調査で1610年前後のものとして位置づけられているおり、加賀からの搬入と考えられる。

中近世土師器の出土量は前期が15.7% (41点)、後期が7.1% (14点)となり、後述する越中瀬戸の素焼皿(b-2)の出土量の増加と反比例する形で漸減する。各層を比較すると、時代とともにa類が減少し、c類が増加する。搬入品であるd類はi・iiから出土した。

b : 越中瀬戸

従来の研究から、施釉は瀬戸(皿)・越前(擂鉢)に、素焼は中近世土師器皿を補完または代替するものと位置づけられることから、施釉(b-1)と素焼(b-2)に分類して計量した。b-1は前期が12.1% (34点)、後期は16.2% (32点)と、比率は増加するが、出土点数そのものに大きな変化はない。期間を通して一定量の生産と流通がされていたと考えられる。b-2は前期が3.2% (9点)、後期が12.1% (24点)となり、比率では約4倍に、出土点数は2.5倍に増加する。

施釉したもの(b-1)については宮田編年により考察した。越中瀬戸の大窯の操業が16世紀末に開始したことから、富山城では、慶長期堀の時期と重なる。出土した器種は皿と擂鉢を中心としており、皿(i : 2点、ii : 13点、iii : 7点、iv : 3点)は実測48点中25点、擂鉢(i : 4点、ii : 3点、iii : 7点、iv : 1点)は計15点と、全体の80%を超える。またiiからiiiにかけて、向付や壺などが出見し、見込みに釉止めの段がない皿が増加することから、宮田編年のII期からIII期、17世紀前半から後半に位置付けられる。

素焼皿(b-2)については現時点で編年されていない。最初に確認された2005年の富山城跡発掘調査の際、1640-1650年の一括生産の可能性が指摘されたが、後の調査で18・19世紀の富山城・城下町遺跡で出土しており[富山市教委2005・2014・2015・2016]、江戸時代を通して生産されたと考えられる。また規格の存在と、各々の存続時期と形状の変化があることも確認できる。今回確認したものは、下記A類、B類の2種である。

A類(i : 1点、ii : 3点、iii : 3点、iv : 1点)：大型のもので口径12~13cm、器高2.1cm前後または3.0cm前後の2種。i~ivを通して出土するが、B類と比較して出土量は少ない。口縁部に油煙が付着しているものが、総点数の80%以上を占める。

B類(i : 1点、iii : 10点、iii : 3点)：小型で口径8~9cm前後、器高1.6~2.1cm程度のものである。素焼皿だが、内面の見込部分に段を持つものと持たないものがある。約55%に油煙が付着する。

B類はiiiから出土が激増しており、この時期に生産が始まった可能性が高い。中近世土師器皿が漸減すること、口縁部に油煙が付着するものが一定量を占めることから、主要な用途の一つに灯明皿があり、中近世土師器皿を補完・代替する形で生産と流通が開始したものと考える。

c : 瀬戸美濃(大窯期)

大窯期については、前期が15.4%、後期が7.6%と、ほぼ半減する。また全体を通して瀬戸美濃が占める比率は低い(i : 5点、ii : 9点、iii : 4点、iv : 1点)。全体に占める比率が低い背景には、i、iiの時期は唐津が大量に搬入され使用されたこと、埋土iiから埋土iii・ivの時期の減少の背景には、

在地窯である越中瀬戸の操業と生産・流通の拡大による市場と需要の変化が考えられる。実測対象とした器種は皿10、楕5、小楕1、壺1、志野2で、主に大窯第IV～V期(16世紀後半)のものである。なおivからは登窯期の遺物が一定量出土しているが、操業期が19世紀以降であり、壁面崩落による上層出土遺物の混入としてここでは触れない。

d : 唐津

出土量が最も多く、全体の約4分の1を占める。i・iiからは、絵唐津や向付を中心に、遺存状態の良いものがまとまって出土した。出土した時期をみてみると、全体に占める比率は前期が28.9%、後期が16.7%とほぼ半減である一方、出土した実際の数量は、前期が81点に対して後期は33点と、比率以上に減少している様相がみられる。i～ivで出土した器種は、i(皿7、絵唐津皿1、向付1、碗1)、ii(皿5、輪花皿2、絵唐津皿4、向付8、輪花など各種中皿4)、iii(皿4、絵唐津中大皿2、中大皿2)である。大橋編年Ⅰ期(1580-1600年)である胎土目積痕が確認できる皿や白濁する藁灰釉、暗緑色の釉薬を施した皿や楕類、木葉または草葉文などを鉄絵で描いた絵唐津の碗や皿・中大皿、透明感のある灰釉を施した向付、Ⅱ期の(1600-1650年)砂目積痕が確認できる灰釉皿等が、i・iiからまとまって出土した。iii・ivからも少量出土している。ivからは大橋編年Ⅲ期(1650-1690年)の遺物である、銅緑釉を施し蛇の目釉剥ぎした波佐見や、刷毛目鉢などが少量出土した。

e : 伊万里

全体に占める出土量の比率は前期が5.7%、後期が16.7%であり、前期の実測遺物が0点、後期が18点である。前期であるi～iiからは実測対象にならない小片のみ出土しており、当該期にはほとんど流通・使用していた形跡は確認できなかった。iiiからは1点(碗：17世紀末～18世紀前葉)、ivからは10点以上しており、肥前陶磁第Ⅲ期(17世紀後半)まで遡る可能性がある碗が2点出土している。

3 小結

①遺物出土状況からみたSD04北側部分の時期

最下層の構造と埋土の堆積状況から、2期(前・後)4段階(i～iv)5層(①～⑤)に分類して考察した。北側の一段深い部分に堆積した埋土(前期／i・ii)からは、中近世土師器皿、越中瀬戸Ⅰ期、瀬戸美濃大窯第IV～V期、唐津Ⅰ・Ⅱ期の遺物がまとまって出土している。一方、伊万里の出土は小破片のみである。加賀からの搬入品と考えられる1610年前後の土師器皿が出土していること、従来の研究から北陸における胎土目積唐津の流通開始が17世紀初頭であり、初期伊万里の食器組成へ導入が17世紀第2四半期とされていることから、i・iiの主な時期は、慶長期に堀が開削された1610年から17世紀第1四半世紀までとなる。

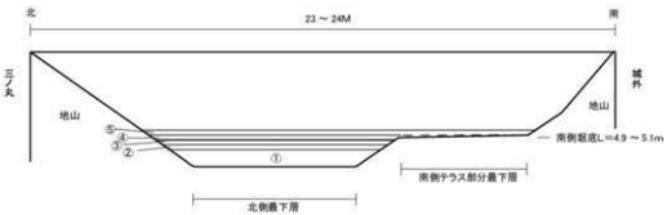
②越中瀬戸素焼皿について

中世土師器口クロア形皿を代替するものとして位置付けられる越中瀬戸素焼皿は、江戸時代を通して生産・流通していたことが確認されており、今回、A類はi～ivを通して、B類は後期(iii)以降にまとまって出土した。このことから、A類は少なくとも17世紀第1四半世紀(慶長期/宮田編年Ⅱ期)以前から、B類は17世紀第2四半世紀頃(寛文期/宮田編年Ⅲ期)に生産が開始された可能性が高い。

③南側テラス部分について

南側テラス底面と同一(iii)または直上(iv)の埋土から、越中瀬戸素焼皿B類、唐津Ⅲ期、伊万里等の遺物が出土する。これは寛文期の堀改修が行われる17世紀後半と時期が一致する。このことから、北側の一段深い部分は17世紀前半に埋没した寛文期以前の堀、南側テラス部分を含めた堀全体の最下層は、17世紀後半の寛文期の改修後の最下層と考えられる。

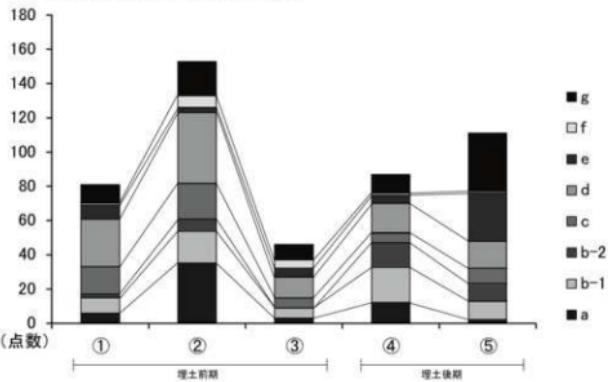
(朝田)



第52図 近世富山城外堀最下層埋土堆積状況略図

	中近世 土器	越中瀬戸 (施釉)	越中瀬戸 (素燒)	瀬戸美濃 (大窯期)	唐津	伊万里	中国 陶器	その他
①	6	9	2	16	28	8	1	11
(内、実測遺物)	(6)	(8)	(2)	(4)	(11)	0	(1)	(4)
②	35	19	7	21	41	3	7	20
(内、実測遺物)	(33)	(17)	(6)	(11)	(24)	0	(4)	(2)
③	3	6	0	6	12	5	5	9
(内、実測遺物)	(2)	(3)	0	0	(2)	0	(1)	0
④	12	21	14	6	17	5	1	11
(内、実測遺物)	(12)	(19)	(13)	(4)	(8)	(4)	(1)	0
⑤	2	11	10	9	16	28	1	34
(内、実測遺物)	0	(4)	(3)	(3)	(8)	(14)	0	(12)

第9表 堀最下層層位別遺物出土点数



堀最下層層位別遺物出土点数比較グラフ

①L=3.6 ~ 4.3m: 北側堀最下層

②L=4.3 ~ 4.5m: 北側堀中層

* 南側テラスへの肩部(最下層)出土遺物含む

③L=4.5 ~ 4.7m: 北側堀上層

④L=4.7 ~ 4.9m: 南テラス部分を一部含む最下層

⑤L=4.9 ~ 5.1m: 堀全体最下層

■ a. 中近世土器 [→減少]

■ b-1. 越中瀬戸 (施釉) [I・II期→III期]

■ b-2. 越中瀬戸 (素焼) [→増加]

■ c. 瀬戸美濃 (大窯期) [→減少]

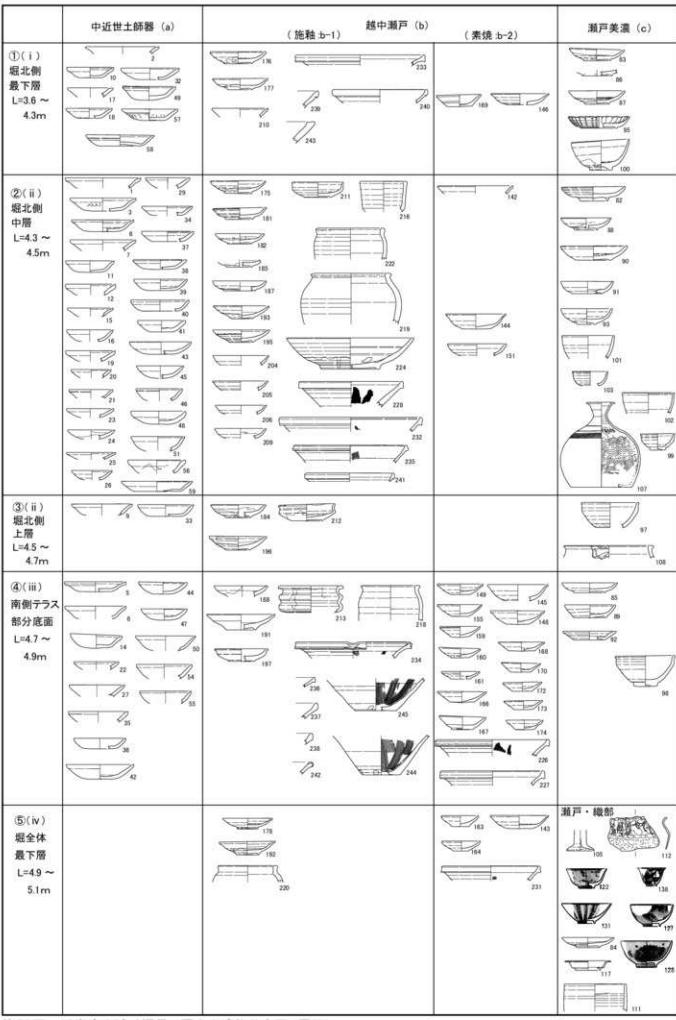
■ d. 唐津 [→減少]

■ e. 伊万里 [→増加]

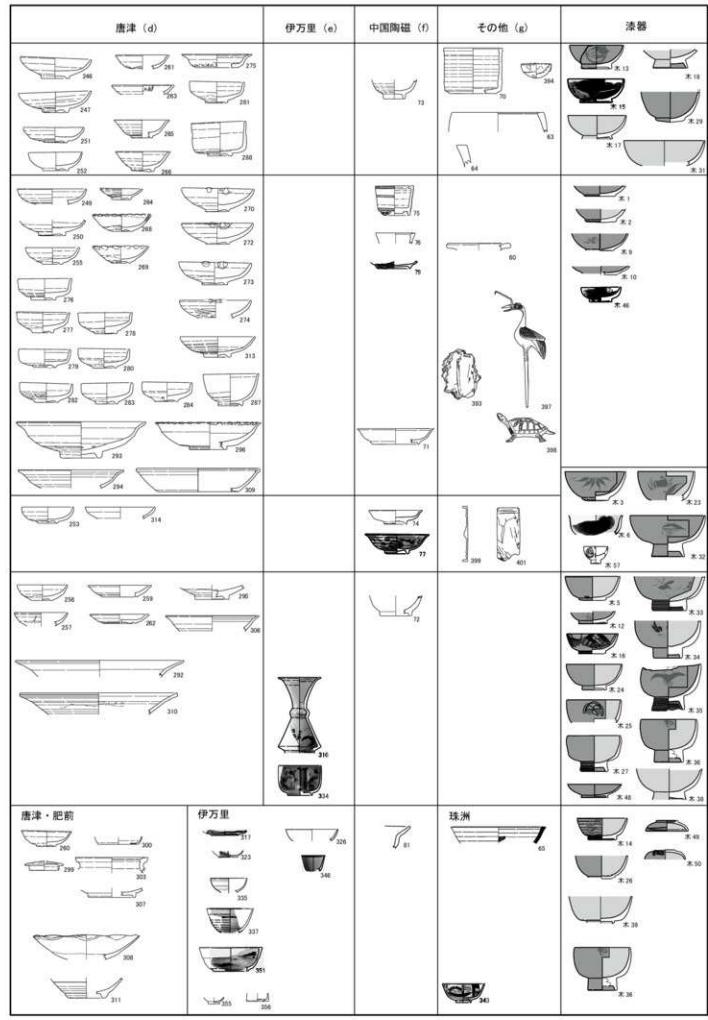
■ f. 中国製陶器 [→減少]

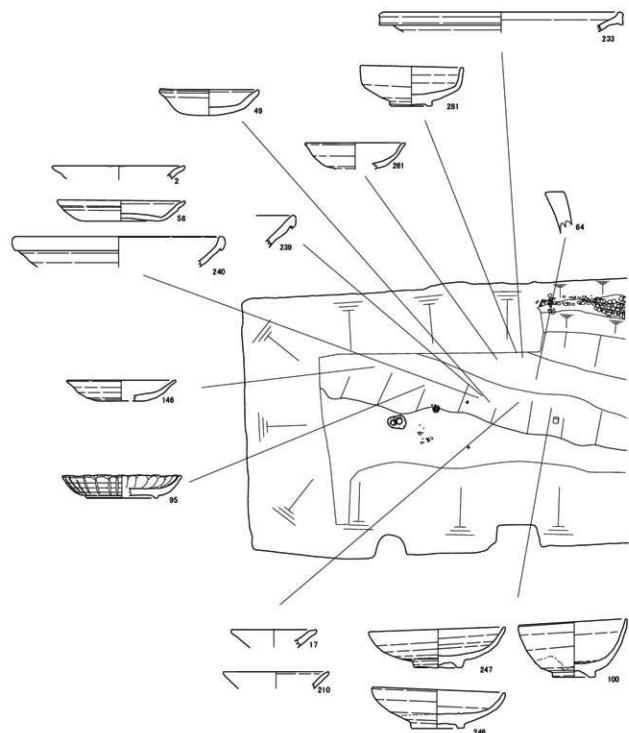
■ g. その他 (越前等中心→近世・近代陶磁器中心)

[] 内は、埋土前期→後期の出土量・性質の変化



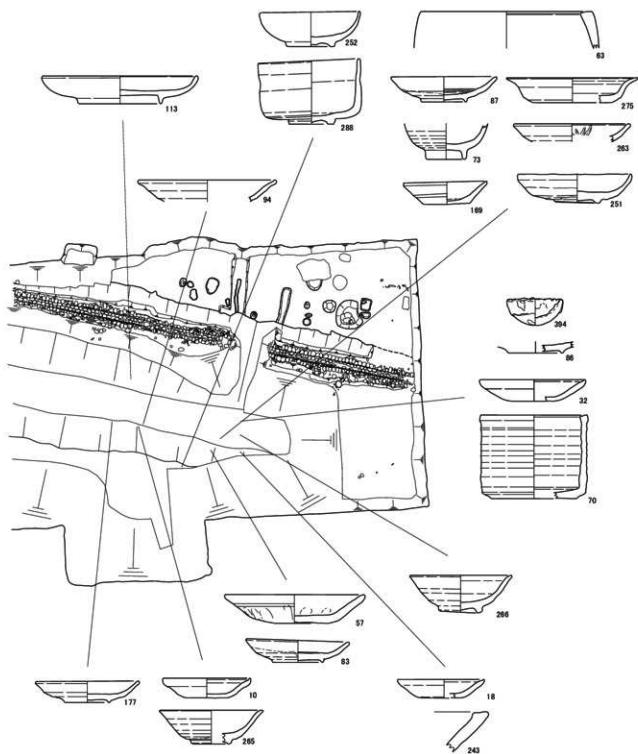
第53図 近世富山城外堀最下層出土遺物分布図(層位)



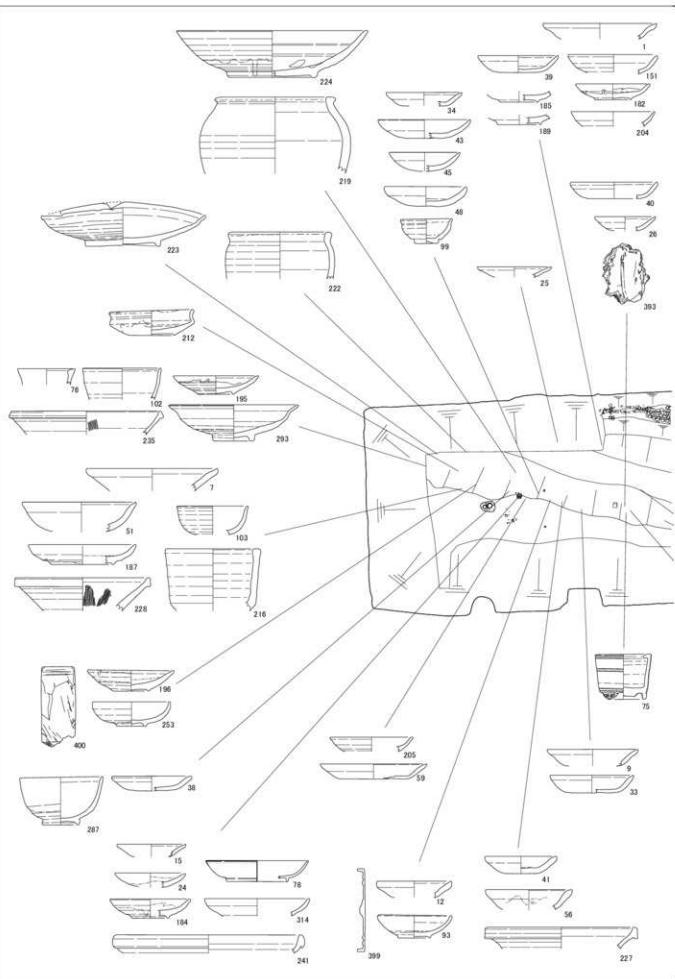


第54図 近世富山城外堀遺物出土位置図i (最下層埋土①出土)

- 136 -

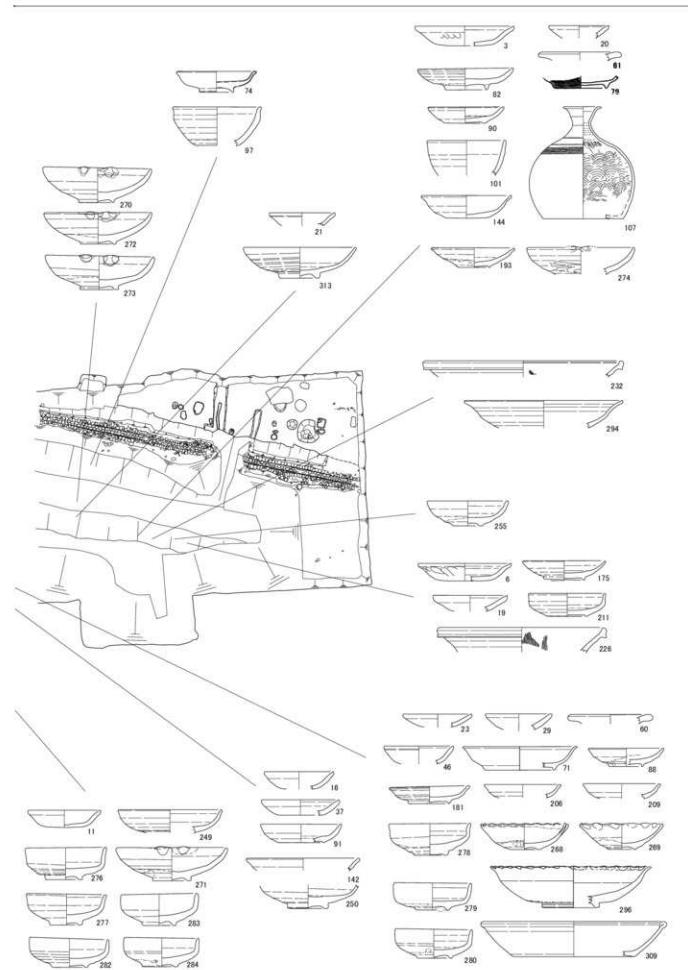


- 137 -

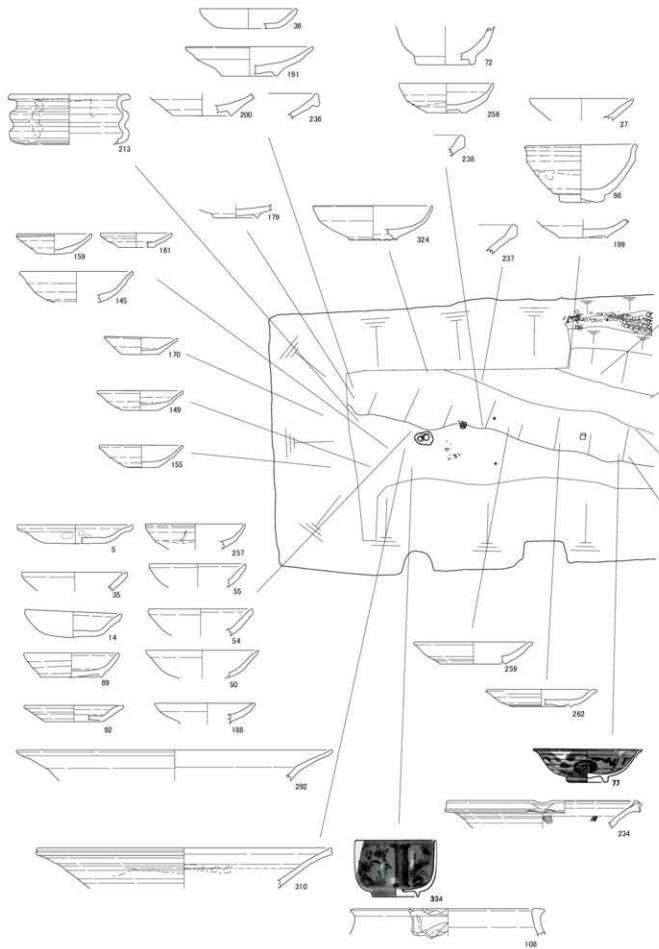


第55図 近世富山城外堀遺物出土位置図ii (最下層埋土②③出土)

- 138 -

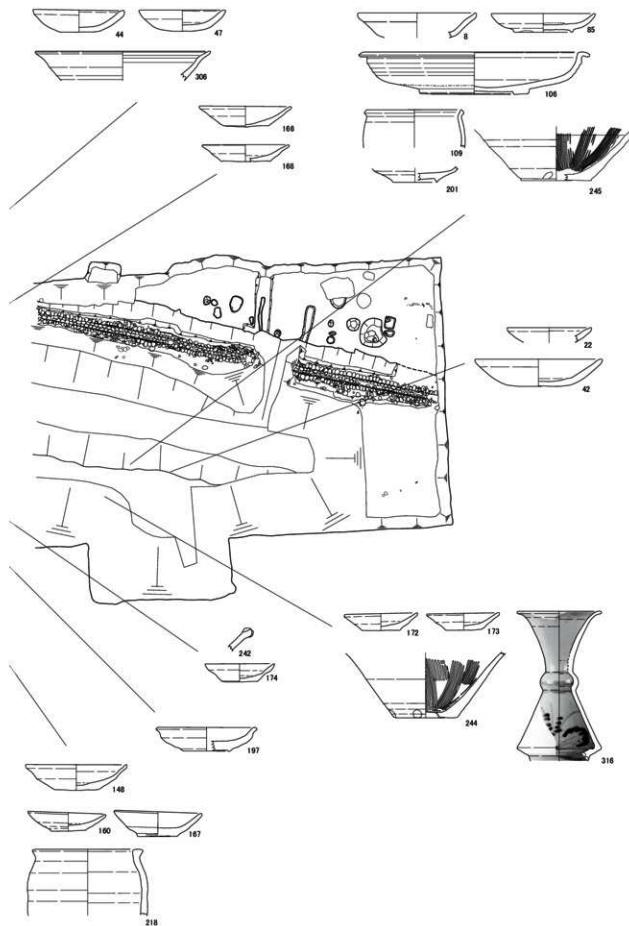


- 139 -

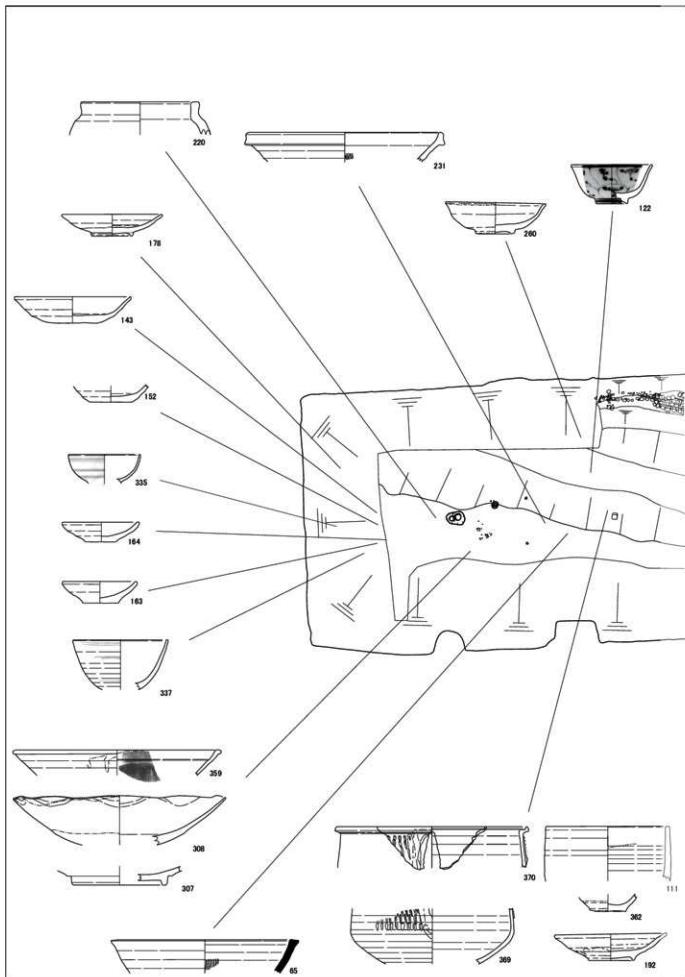


第56図 近世富山城外堀遺物出土位置図iii（最下層埋土④出土）

- 140 -

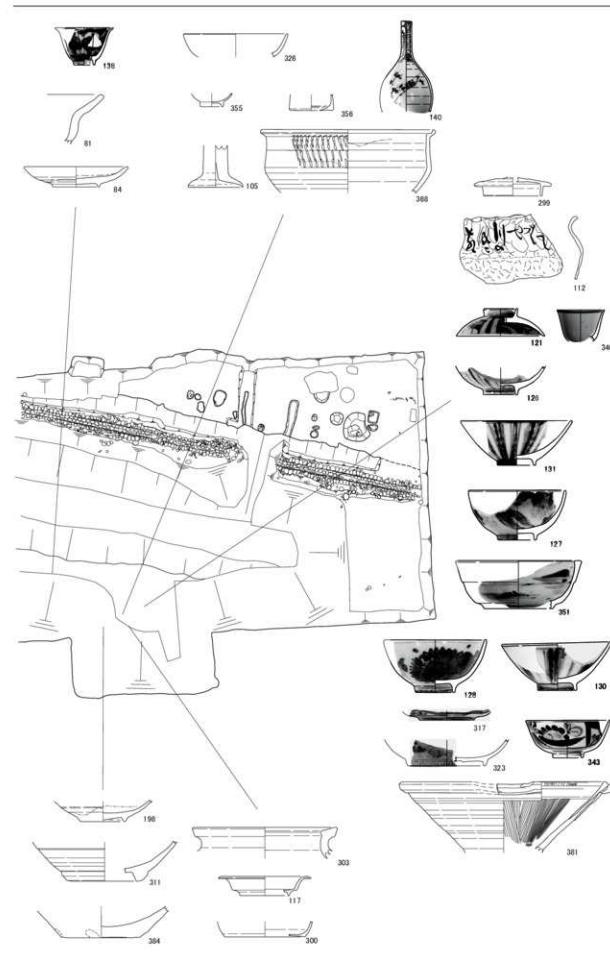


- 141 -



第57図 近世富山城外堀遺物出土位置図iv（最下層埋土⑤出土）

- 142 -



- 143 -

第2節 近世富山城外堀について

(1) 外堀の位置

ここでは、近世富山城のうち、前田利長が隠居城として慶長10(1605)年に整備した城を「慶長期富山城」、初代富山藩主前田利次が寛文元(1661)年から改修し、その後藩主の居城となった城を「藩政期富山城」と呼称することとする。

外堀は、寛文以降に描かれた絵図を見ると、藩政期富山城の三ノ丸を「コ」の字に取り囲むように描かれており、三ノ丸の外側に巡らされていたことが分かる。その後、明治期に埋め立てられ、市街地となつたため、現地でその位置を特定することは困難である。しかし、江戸時代の古絵図と外堀埋め戻し途中段階が描かれた明治時代の地図を基に藩政期富山城の外堀の位置を推定することはできる。西外堀は一般県道小竹・諏訪川原線の東側(丸の内1丁目～平吹町)、南外堀は総曲輪通りの北側(平吹町～総曲輪3丁目)、東外堀はみどり通りの西側(総曲輪3丁目～総曲輪1丁目)に面した位置にあつたと考えられる(第62図)。

それ以前の慶長期富山城の外堀の推定位置については「(3)研究史」に詳細を記すが、2つの説がある。一つは藩政期富山城外堀が慶長期富山城外堀を改修したので同じ位置にあるとする「既存堀改修説」、もう一つは寛文期の改修の際に造り替えられたとする「堀造り替え説」であるが、現状ではどちらが正しいかを示す有力な手掛かりはない。

(2) 外堀に関する文献史料

利次による藩政期富山城の改修内容は、万治4(1661)年の『江戸幕府老中連署奉書』(以下『万治四年奉書』)に詳細に記載されている【史料A】。『万治四年奉書』の中で外堀に関する記載は「惣構東西南三ヶ所堀狭ニ付而広候事」とあり、東西南3箇所の惣構(外堀)が狭いので広げることが幕府から許可されている。

しかし、利次の改修は完了しなかつたため、延宝5(1677)年に2代藩主正甫が亡父の改修仕残しの普請を幕府に許可を求めている。正甫による城の普請内容は、延宝5年の『越中国富山城絵図』(富山県立図書館蔵、以下『延宝絵図』)に詳細に記載されている【史料B】。『延宝絵図』の中で外堀に関する記載は「惣堀埋リ候を浚申度候事」とあり、惣堀(外堀)については堀浚いの許可のみを求めている。

(3) 研究史

近世富山城の外堀に関する研究は、深井甚三氏の絵図研究(深井1995b)や古川知明氏の絵図のGIS化による絵図の比較研究(古川2006)などがある。

(i) 深井甚三氏の絵図研究(既存堀改修説)

①『越中国富山古城之図』(巻頭写真3、金沢市立玉川図書館蔵、以下『正保絵図』とする)

絵図は、正保4(1647)年に加賀藩が幕府に提出した正保城絵図の写しとされ、正保4年から寛文元年までの間に於ける富山藩借城期の富山城下町に描いた絵図であり、支藩である富山藩が借城という制約がある中で城や城下町を改編することはありえないで、慶長14年に焼失した慶長期富山城の姿をそのまま残したものと描いたとされる。

②『万治年間富山旧市街図』(巻頭写真4、個人蔵富山県立図書館寄託、以下『万治絵図』とする)

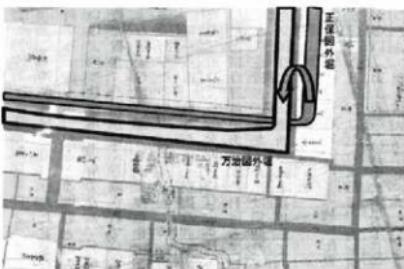
絵図は、寛文3年～同6年に描かれたものであり、利次が幕府から改修の許可を得て、寛文元年から城の改修に取り掛かってしばらくの藩政期富山城・城下町を描いた絵図である。

深井氏は、①と②の絵図の城下町プランを比較し、富山藩が借城のため城下町の大きな改編ができるないと推測し、藩政期富山城の城下町は利長が整備した慶長期富山城の城下町をほぼ受け継ぐものとしている。また、城郭の位置も簡単に幕府の許可が出ないことを考慮して、変更がないとしている。このことから、慶長期富山城と藩政期富山城の縄張は基本的に一致した縄張を持つ（＝外堀の位置が同じ位置にある）と考えている。

(ii) 古川知明氏の絵図のGIS化による絵図の比較研究（堀造り替え説）

小川幹太氏が発掘調査で検出した背割下水を元に、背割下水が描かれている『万治絵図』など4枚の絵図を富山市街地空写真オルソ画像に重ね合わせて、現存している道路などを基準にして調整して古絵図に公共座標を付与するという手順で、高精度補正した『万治絵図』などを作成した。さらに、高精度補正した『万治絵図』に『正保絵図』を重ね合わせて、両絵図に描かれる飛騨街道などを基準にして調整して、高精度補正した『正保絵図』も作成した。古川氏は、小川氏が作成した高精度補正の『正保絵図』と『万治絵図』を重ね合わせた結果、外郭周辺における慶長期富山城下町から藩政期富山城下町への構造的変化が明瞭になったとし、以下の変化を指摘している〔古川・小川2008〕。

- A. 堀・土壘位置の変化
 - B. 外堀外縁における町割・街路の変化
 - C. 北陸街道ルートの変化
- 堀に関するAの指摘では、寛文期の城郭改修の際に藩政期富山城南外堀は、慶長期富山城南外堀の南端の一部が利用されつつも大部分は南側に掘り直されたと推測した。東外堀も西側に移動した位置に掘り直されたものとし、慶長期富山城の土壘は慶長期の外堀の埋め立てに利用されたとした（第58図）。このことは、『万治四年奉書』を大きく逸脱した改修内容と述べている。



第58図 堀・土壘位置の変化

（古川・小川2008より）

第10表 正保城絵図の城郭部と城下部比較表

城名	城郭部縮尺	城下部縮尺
会津若松城	1/1200(二分一間)	
松江城	1/600(一分一間)	城郭部に対して いくらくらか縮小
小倉城	1/1000(六分十間)	
弘前城	1/1000(六分十間)	1/1400
広島城	1/1200(一分二間)	一分三間
富山城	1/1200	

※(矢守 1979)を表にまとめ、富山城を追加したもの

(4)『正保絵図』の精度

正保城絵図の精度に関しては、矢守一彦氏が「幕府へ提出の城下絵図について」〔矢守 1979〕の中で5城の城郭部と城下部の縮尺の比較（第10表）を示し、「城郭部の方が城下部に比し大縮尺で描かれている」と指摘している。矢守氏は、このように城郭部と城下部の縮尺が違つて描かれているのは「正保城絵図が、城の縄張りを書き上げさせることを主目的としたものだからだろう」と述べている。

慶長期富山城を描いたとされる『正保絵図』は、加賀藩が幕府に提出した正保城絵図の写しと推測されている。加賀藩が描いたその他の正保城絵図は現存しないため、加賀藩が城絵図を作成する際に城郭部と城下部の縮尺を違つて描いたのかは不明であるが、矢守氏が指摘するように城郭部を大きく描いたと仮定すれば、小川氏が城下部の飛騨街道などを基に高精度補正して作成した『正保絵図』は、城郭部と城下部の位置関係を正しく表わしていない可能性があり、小川氏の地図を基に古川氏が推測した位置には慶長期富山城の堀跡は存在していないことも考えられる。

(5) 既往の調査

平成 20・21 年度に行った市内電車敷設工事に付帯するライフライン（NTT・水道・下水道・電気・ガス）掘削工事の立会調査で、藩政期富山城外堀北側にあった大手門楔形石垣を検出した。また、大手門石垣の北約 25 m の地点で幅約 20 m を測る堀状遺構を検出し、古川氏の指摘する慶長期富山城の南外堀と推測した〔富山路路推室・富山市教委 2009〕。

平成 27 年度に総曲輪レガートスクエア（第 2 期）（2015d）の調査は、前述の堀状遺構検出地点の約 90 m 西側で行った調査であることから、古川氏の指摘どおりであれば堀状遺構の続きを検出すると考えられたが、続きを検出しなかった。

また、ユウタウン総曲輪（2014e）調査区の 3・4 区で、南外堀の調査を行い、南外堀の北肩部と外堀北側にあった土墻基底部の痕跡を確認した〔富山市教委 2015〕。

(6) 外堀の構造

藩政期富山城外堀を堀底まで発掘した調査は、今回の調査が初めてである。調査の結果、北側に深い堀底と南側に浅いテラス底を持つ二段掘りの構造をしていることが明らかになった（第 III 章）。

ここでは、外堀の構造について検討する。

絵図との検討 藩政期富山城南外堀の平面形を『万治絵図』で見ると、大手より西側は西に向かって段々と堀幅が広がっていくことが確認できる（第 59 図）。平面図（第 12 図）を見ると、道路境界線（外堀南肩）の主軸方向 E-6°-S に対して、外堀北肩の主軸方向は南肩と平行ではなく E-12°-S となっている。このことから、絵図のとおり、外堀が西に向かって段々と堀幅が広がっていくことが発掘調査でも確認できた。外堀北肩から道路境界線までの距離を堀幅とすると、調査区東端では約 24 m、調査区西端では推定約 28.5 m を測る。

堀断面の検討 第 60 図は、外堀断面図（第 13 図）

と南テラス底断面図（第 14 図下段）を合わせた堀全体の合成断面図である。両断面には東西に約 7.5 m ズレがあり、厳密には同一ライン上にはない。

外堀 10 層と南テラス底 11 層（南テラス底最下層）の堆積土は、礫混じりの黒色～黒褐色砂質シルトであり、ほぼ同質の堆積土である。このことから、外堀 10 層と南テラス底 11 層は第 60 図で示すように同一層と考えられる。「第 1 節」で iii・iv とした遺物は、外堀 10 層・南テラス底 11 層およびその層直上から出土した遺物であり、遺物の時期は 17 世紀中頃～後半である。この時期は、寛文期の改修で藩政期富山城外堀が掘り直された時期と一致していることから、外堀 10 層～南テラス底 11 層の下面が藩政期富山城外堀の堀底であったことが考えられる。南テラス底の標高は 4.7 ～ 4.9 m で、西に向かって低くなっている。

以上のことから、藩政期富山城外堀は、標高 4.7 ～ 4.9 m を底面とする箱堀であったと言える。

この層より上部の堆積土である外堀 3 ～ 7 層は、ほぼ同一のオリーブ黒色シルトが平行堆積しており、藩政期富山城外堀として機能していた約 200 年間で徐々に埋没していく自然堆積したと考えられる。



第 59 図 『万治年間富山旧市街図』(部分)

外堀最下層の検討 外堀堀底で北側の深い部分を外堀最下層とする。

第60図から外堀最下層より上部は藩政期富山城外堀掘削時に削平を受けたものと考えられ、外堀最下層は古い堀の堀底が残存したものと考えられる。残存した堀の規模は、上幅約8m、下幅約3mを測る。外堀最下層南肩（南テラス底へ変化する肩）の主軸方向はE-12°-Sであり、外堀北肩の主軸方向と平行である。

外堀最下層からは「第1節」でi・iiとした遺物が出土しており、遺物の時期は17世紀前半である。

以上のことから、外堀最下層を堀底とする堀は、主軸方向E-12°-Sを持ち、藩政期富山城外堀より古い17世紀前半には埋没した堀であることから、利長が整備した慶長期富山城の外堀であると言える。

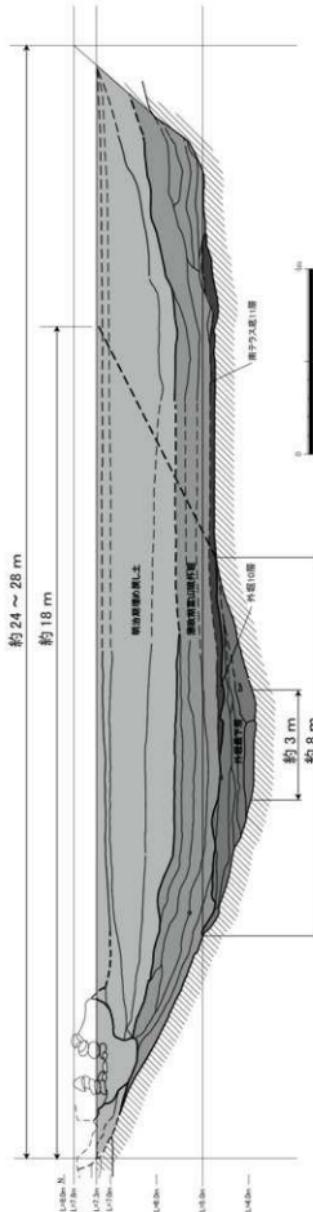
削平された慶長期富山城外堀南肩を復元すると、慶長期富山城外堀の堀幅は推定約18mであったと考えられる。

(7) 考察

発掘調査の結果、慶長期富山城外堀が藩政期富山城外堀と変わらない位置にあったと確認したことは、深井氏の『既存堀改修説』が正しいということが分かった。

堀幅約18mであった慶長期富山城南外堀が、寛文期の改修により堀幅が約18～34mに広げられており、このことは『万治四年奉書』の「惣構東西南三ヶ所堀狭二付而広候事」と書かれた外堀に関する記載内容と一致する。これにより、利次は『万治四年奉書』の内容を逸脱せずに改修を行っていたと言える。外堀以外の改修についても、『万治四年奉書』とのおりの改修を行っていたものと推測され、その改修仕残しを正甫が『延宝絵図』を持って幕府へ許可を求めたと考えられる。

また、調査の結果、古川氏が指摘した3つの変化のうち、「A. 堀・土壠位置の変化」は起きていないことが分かった。よって、平成20・21年度の立会調査で大手門石垣の北約25mの地点で見つかった幅約20mを測る堀状遺構は、慶長期富山城



第60図 外堀横断面合成図

の外堀ではないと考えられる。

しかし、外堀の拡張によって、調査区西端で堀幅は約 10 m、さらに西では最大 16 m 拡張していることから、「B、外堀外縁における町割・街路の変化」「C、北陸街道ルートの変化」に関しては、その変化が起きていたことが十分に考えられるが、ここではその検討は行わないこととする。

(8) 南テラス底で検出した SE20・SE22（第 12・16 図）

南テラス底の褐色砂質土（基本層序Ⅶ層、地山）で検出した SE20 から結桶、SE22 から曲物が出土した。SE20 結桶は、自然科学分析の結果から戦国時代後期～江戸時代前期のものとの結果が得られた（IV 章第 2 節）。SE20 結桶は慶長期外堀掘削により井戸の上部構造が削平されたと考えられるので、戦国時代後期の井戸枠用結桶であり、それが残存したものと言える。SE22 の曲物も同様のものである。

松永篤知氏は、ユウタウン総曲輪（2014e）調査区において結桶組型井戸枠の下位構造と透水層の関係に着目し、標高 5 ～ 6 m（場所によっては 5 m 以下）に透水層である砂層があり、その高さを井戸底面とした結桶組型井戸枠が構築されていたと推測している。（松永 2015）。松永氏のいう透水層である砂層とは、本調査区における基本層序Ⅶ層の褐色砂質土を指すと考えられる。SE20 結桶底面は標高 4.3 m であり、結桶を設置した戦国時代後期はこの高さが本調査区付近の透水層であったと考えられる。

慶長期富山城外堀の堀底は標高 3.8 m であり、透水層の標高を 0.5 m 下回る。しかし、慶長期富山城外堀を掘削した当時の透水層から水が湧き出していたとすれば、掘削中に砂質土である基本層序Ⅶ層は激しく崩れたことが予測されるが、そのような痕跡は確認できなかった。このことから慶長期の透水層が標高 3.8 m 以下に低下していた可能性が考えられる。一方、藩政期富山城の堀底には、疎混じり黒（褐）色砂質シルト（外堀 10 層・南テラス底 11 層）が幅約 11 m、厚さ 0.2 m で堆積している。この層より上層は、自然堆積したオリーブ黒色シルト（外堀 3 ～ 7 層）が堆積しており、この層とは土質が全く異なる。これは、寛文期の改修時に透水層が南テラス底である標高 4.7 m 付近まで上昇し、掘削足場が不安定であったことから、その安定のために底面に敷き詰めた層ではないかと推測する。

(9) 南外堀の変遷

第 61 図は南外堀の変遷を表したものである。

室町時代後期～戦国時代後期 室町時代後期には集落の区画溝があった。戦国時代後期には結桶組型井戸など数基の井戸が設置された。井戸は当時の透水層まで掘削された。

慶長期富山城外堀（江戸時代初頭） 慶長 10 年に前田利長によって慶長期富山城と城下町が整備され、外堀は推定幅約 18 m、深さ約 4.0 m の箱堀が掘削された。慶長 14 年に大火により城は焼失し、廢城となった。外堀 13 層には焼土が混ざっており、慶長 14 年大火の整地土が外堀に廃棄されたもののが可能性がある。この時に戦国時代後期の井戸の上部構造は壊され、最下部の結桶や曲物が残存した。

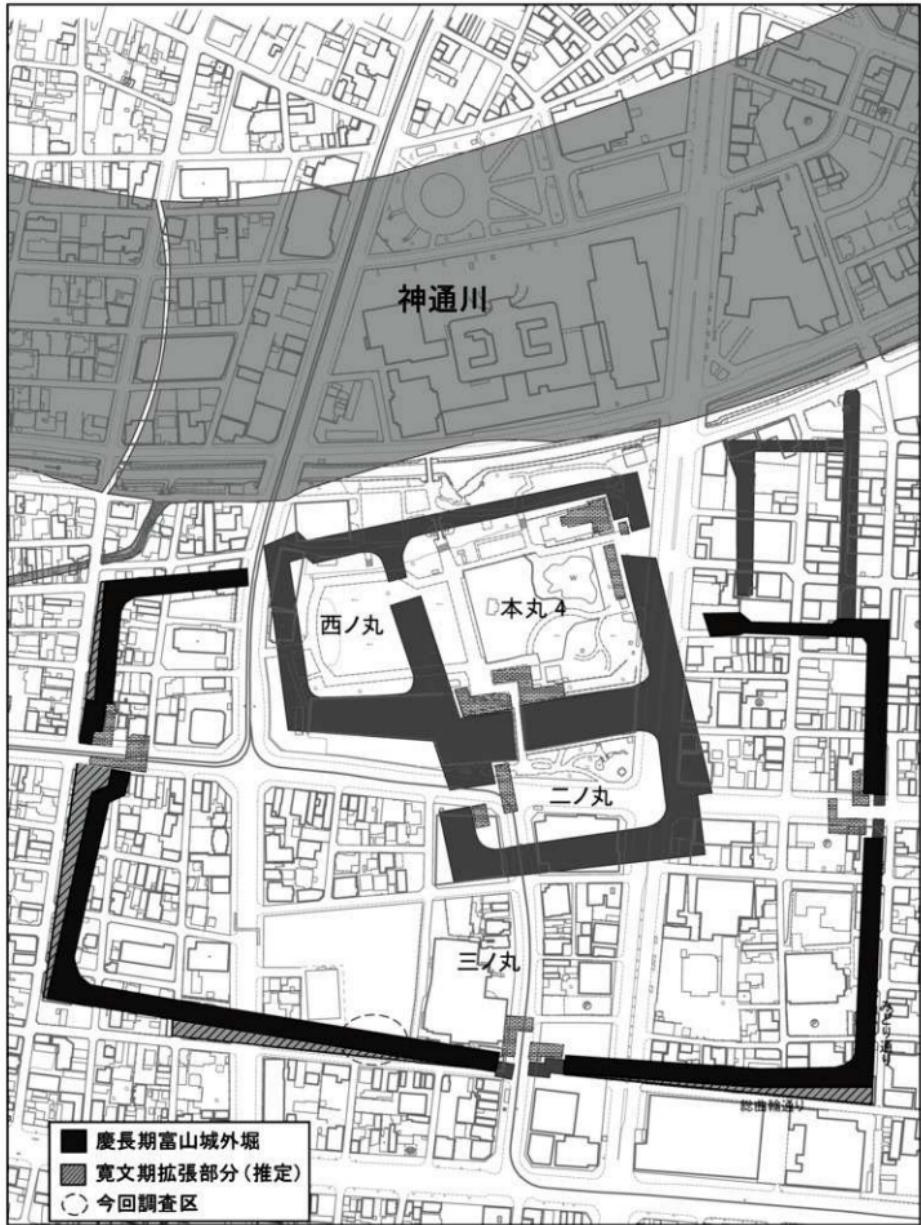
藩政期富山城外堀（江戸時代前期～明治時代中期） 万治 4 年幕府から富山城改修の許可が出された。それを受け、寛文元年から慶長期富山城外堀を改修し、南外堀は南へ拡張した。南外堀は幅 18 ～ 34 m、深さ約 3.0 m の箱堀が掘削された。延宝 5 年までには外堀の改修は終わっており、外堀の堀浚いの許可を幕府に求めた。明治時代に埋め立てられるまで約 200 年間藩政期富山城の外堀であり、水堀として機能していた。

明治時代中期以降 明治 18 ～ 25 年の間に外堀は埋め立てられ、埋め立てた土地は民有地として払い下げられた。その際に地境を示す石組水路が設置された。埋め立てられる前にニノ丸二階櫓御門石垣の解体石材が外堀へ廃棄された。

（堀内）

時期	断面図	特徴
室町時代～戦国時代		<ul style="list-style-type: none"> 室町時代後期に集落の区画溝が掘削される。 戦国時代後期に透水層に到達する結構組型井戸が造られる。
慶長期富山城		<ul style="list-style-type: none"> 慶長10(1605)年に前田利長によって慶长期富山城が整備される。 井戸の上部構造は壊され、結構のみ残存。 透水層は低下か
藩政期富山城		<ul style="list-style-type: none"> 寛文元(1661)年から初代富山藩主前田利次が富山城を改修。 慶長期富山城外堀を南へ拡張。 透水層は再び上昇か
明治時代中期以降		<ul style="list-style-type: none"> 明治18～25年の間に外堀は埋め立てられる。 埋め立て前に二ノ丸二階櫓御門石垣が外堀に廃棄される。 埋め立て後、地境に石組水路が造られる。

第61図 富山城南外堀変遷模式図



第62図 慶長期富山城外堀及び寛文期拡張部分推定図

【史料A】『富山侯家譜』

就百塚領越州富山得替候、富山古城被取立之候、因茲天守・土臺石置之、同天守建之事、土橋取崩懸橋之事、增三ヶ所立候事、二階門三ヶ所立候事、冠木門七ヶ所立候事、木戸七ヶ所立候事、石垣四ヶ所崩候付築之事、本丸二之丸西之出丸三之曲輪、此所土居之上掛堀之事、惣構東西南三ヶ所堀狭二付而広候事、東之出丸堀埋候、東の方江広之堀ヲ掘、東西南三方土居築之、懸堀之事、本丸二之丸西之出丸之堀三ヶ所埋候二付而浚候事、被注絵図ノ通承届、及上聞候之處、以連々普請可申付旨、被仰出候間、可被得其意候、恐惶謹言。

万治四年丑五月朔日

阿部豊後守

稻葉美濃守

松平伊豆守

酒井雅楽頭

松平淡路守殿

(金沢市立玉川図書館蔵)

天保十一(一八四〇)年頃『越中史料』)

【史料B】『越中国富山城絵図』

一富山城本丸東方出丸左右之石垣出来候此所二階門并冠木門建申度候事
一同所南二丸之出口左右石垣出来候此所二階門并冠木門立申度候事
一同所西出丸之出口釘貫門立申度候事
一同所北方より西江土居築之堀を掛申度候事
一同所艮之角石垣之上多門立申度候事
一同所東ヨリ南迄土居築之堀掛申度候事
一同所巽方天守台石垣築之天守立申度候事
一同所北方神通川縁東ノ木戸ヨリ西ノ木戸迄堀付申度候事

一一二丸東ヨリ南西之懸土居築之堀を掛、巽方矢倉建申度候事

一同所西方三丸之出口左右之石垣并二階門出来候此所冠木門立申度候事
東出丸北ヨリ東南之土居築之同堀掛申度候事

一同所本丸との間北方釘貫門建申度候事

一同所本丸之間南方三丸の出口釘貫門建申度候事

西出丸南より西北迄土居築之同堀を掛申度候事

一同所乾之角矢倉立申度候事

一西出丸之西方三丸之間此方釘貫門立申度候事

三丸北西之上居築之同堀掛申度候事

一同所西方出口淡路守時分南向に門立申度候由及御断候(共

唯今は絵図之通西向に門立申度候事

一同所西南之土居築之堀掛申度候事

一南方之出候門建申度候事同南東之土居築之堀掛申度候事

一東方出口門立申度候事同東北之土居築之掛申度候事

一東出丸之堀埋申度由亡父淡路守申上候得共其假差置申度候事

一同所東方新規堀掛申度之旨淡路守申上候(共其假差置申度候事

一同所橋掛申度候事

右万治四年淡路守以絵図奉伺之奉書被下候得共

普請仕残候分御座候

代替候間重而申伺候

以連々絵図之通普請
申付度奉存候 以上
延宝五年八月五日
松平大藏大輔(判)
(富山県立図書館蔵 延宝五(一六七七)年)

第3節 石垣石材と石造物について

(1) 石垣石材

石材の原位置の推定 今回の調査で、明治期に埋められた外堀埋土から廃棄された石垣石材60石が出土した。最初にこれら石材がどの石垣に使用されていたものか検討する。

石材の特徴は次のとおりである。

- ①花崗岩類の割石と粗加工割石の2種類があり、江戸時代前期の慶長期および富山藩初期(寛文期)の特徴を示す。
- ②慶長期の特徴である小型刻印をもつ石材が1石ある。
- ③19石に漢数字の墨書きがある。石垣を積み直す際の順序を表したものと推測される。
- ④被熱した石材があり、火災に遭ったことが推測できる。

以上の特徴から、石材は、慶長期に築造され、火災に遭い、かつ修理のため積み直しがなされた石垣に使用されていたと推定できる。さらに60石ものまとまった数が出土していることから、すでに解体された石垣と考えられる。これらの条件から、二ノ丸に存在した二階櫓御門石垣である可能性が最も高い(第63図)。

二階櫓御門石垣は、慶長10(1605)

年に築造された。その後、寛文元年(1661)頃、富山藩による改修が行われる。また、天保2(1831)年に大火で損傷した後、翌3年に幕府に修理を申請し、許可されている。嘉永7(1854)年には再度不完全な箇所の修理願いが出された。安政5(1858)年の大地震でも石垣は崩れたが、このときの修復記録は不明である。なお、二階櫓御門石垣を描いた「櫓御門新絵図」は、石垣面の石材一石一石を表現しており、地上部は約600石の石材で構成されている[古川2008a]。今回の調査ではその約1割が出土したことになる。

廃棄の過程 二階櫓御門は、明治8(1875)年から児童小学校として利用されるが、同16年小学校の移転に伴い二階櫓御門と石垣は解体された。その後、石垣石材は約220m離れた外堀へ廃棄されたとみられる(第64図)。

以上の経緯から、外堀への廃棄は明治16年以降のことといえる。明治18年の「富山市街見取全図」では本調査区付近の外堀はまだ埋まっ



第63図 明治期解体前の二階櫓御門石垣(富山市郷土博物館蔵)



第64図 二ノ丸ニ階櫓御門石垣の位置と石材出土地点
(「前田利同城囲の図」部分を改変 富山市郷土博物館蔵)

ていないが、同25年「富山市実測全図」では埋まった状況が描かれることから、石材の廃棄は、外堀の埋め立てとともに明治18年から25年の間に行われたと考えられる。その場合、明治16年の石垣解体後、石材はしばらくどこかに仮置き・転用されていたか、あるいは明治16年時点では石垣は完全に解体されておらず、明治18年以降、再度解体があり外堀へ廃棄された可能性がある。
（野垣）

石垣石材の年代 石垣石材は早月川花崗岩を主とし、大熊山花崗閃緑岩を少量含む。早月川花崗岩の多くは玉石から石割したことが明らかであることから、石材は早月川河川敷において獲得されたと推定できる。長秋雄氏による県内河川敷における石材調査の岩石帶磁率調査結果から、花崗岩類は早月川河川敷から獲得された可能性が高いことが指摘されており〔長2016〕、このことを補完する。

富山城本丸石垣における早月川花崗岩には小型刻印が多く認められ、慶長10年加賀藩主前田利長が隠居して築城した富山城の石垣石材として調達したものである。今回出土石材にはこれと同じ大きさの刻印を含み、同形の刻印は、富山城本丸搦手南石垣東堀面（K面）に1個存在する〔富山市教委2007〕。また石材の半数は面加工の少ない割石である特徴を踏まえると、慶長10年調達の石垣石材であると推定される。

石材の規格をみると、2種類がある。控え長が長い33石は、控え長が20寸を超え、石面寸法の約2倍以上の長さがある。一方控え長が石面寸法と大きく変わらない石材27石は、上記石材を分割転用したもの、大面を石面に転用したものなどがあり、小型品が多い。この中には三角柱形の形状を呈する間知石とみられるものもある。それらの特徴から、前者は慶長10年調達石材、後者は金沢城石垣編年〔石川県金沢城調査研究所編2009〕の3～5期、元和～元禄頃の粗加工石材と共に通し、富山城においては、富山藩が慶長期富山城を改修した寛文元年頃の石垣石材と推定できる。後者の石材は、分割しているものが見えることから、新たに調達したものではなく、破断した慶長期の旧石材を再利用するなどしたものと理解できる。

漢数字墨書きについて 石垣石材にある墨書きのうち、2桁・3桁の漢数字が記されるものについて検討する。

石垣石材に墨書きが行われる事例は少なく、富山城石垣において慶長期小型刻印と共に通する記号墨書きが知られていたが、その後平成18年度の本丸石垣解体修理工事に伴い、石垣石材の洗浄を行ったところ、漢数字・人名等・記号・花押？・割付線などが記された墨書きが確認された。漢数字には墨書きと朱墨書きの2通りがあり、1石に墨書き・朱墨書きの両方が書かれたものもあった。この漢数字には2桁の漢数字のほか「〇／〇」「〇／〇／〇」とノ字を入れ、数字を2・3に分けるもの、「〇／〇／〇」の場合末尾を数字ではなく「右」と表記するもの、別に「上」を付記するもののが存在した。これらは積み直し時の覚えと推定した〔古川2007〕。

今回の出土石材は、2桁の漢数字は共通するが、3桁の漢数字は、ツの有無にかかわらず本丸石垣石材の表記方法とは異なる。

漢数字の書かれた場所をみると、石面に書くものと大面に書くものに大別され、大面に書くものは、①石尻側から書くもの8石、②真横から書くもの4石、③石面側から書くもの3石に分けられる。①には石面寄りに書くもの（石12・18・24）、石尻寄りに書くもの（石15）、中央に書くもの（石14・25・27・28）があり、石25は中央に斜めに書く。③には石面寄りに書くもの（石13・21）、石尻寄りに書くもの（石22）がある。②には漢数字にツが付くものは含まれない。

以上のことから、漢数字の書き方には、横方向から書くものについてはツの有無が規定するといえる。よってツの有無により2種類あるいは2時期の墨書きの存在が推定できる。ツは片仮名であるが、それ以外の片仮名は見えないことから、特定の場所や序列を示すために特別に付与されたことも想定される。

これらはいずれも墨書後に石割されているものを含むことから、墨書は石割以前に行われたといえる。石垣の歴史からみると、寛文元年頃、富山藩による石垣改修時に再利用のための石割が行われたことに整合するが、石割は必ずしもその時期に限定できない。二ノ丸二階櫓御門石垣は、天保2年の大火後、嘉永7年に修理を行っており、また安政5年飛越大地震の際にも石垣崩落が発生しており、記録はないが修理されている〔古川2008a・2014〕。このことから複数回発生した修理のうちいずれかに特定することは、現段階では不可能であるが、墨書後の石割行為を踏まえると、寛文期修理、次いで嘉永7年修理の可能性が高いといえる。墨書の時期比定については今後の課題としておきたい。

(古川)

(2) 石造物

手水鉢 石垣石材を転用した手水鉢である。矢穴や形状は、慶長期あるいは富山藩初期の石材に類似しており、江戸時代前期に調達された石垣石材が転用された可能性が高い。転用の時期は不明である。

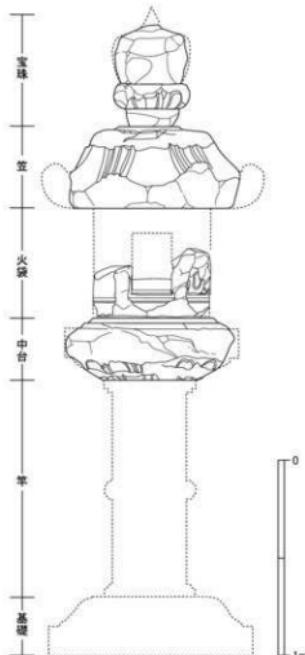
これと同様に石垣石材を転用した手水鉢が、富山城の北西約1kmの舟橋今町神明社にあり、市埋蔵文化財センターホームページに概要を紹介している。それによると、長さ36寸、幅20寸、高さ11寸で、早月川産花崗岩の石垣石材の大面に水穴を穿った横長の手水鉢である。銘から明治17年の奉納とわかる。なお、前述したとおり、明治16年に二階櫓御門石垣が解体されたとみられ、その直後の奉納であることから、神明社例は二階櫓御門石垣の石材が転用された可能性がある。

今回出土した手水鉢は縱長の形状で、神明社例とは異なる。寺社等に設置される手水鉢は、神明社例のように横長の形状のものが多く、出土手水鉢は庭園に置かれたものと推測する。

六角型燈籠 出土した六角型燈籠の4つの部材(宝珠・笠・火袋・中台)は、一つの個体を構成していたとみられる。第65図に復元図を示した。推定高は3.3m前後である。火袋の文様は鹿と雲が確認でき、残る2面は類例から三笠山と透かしと推測され、いわゆる春日型燈籠であろう。

出土状況から近世のものと推測する。京田良志氏の研究〔京田1970〕を参考にすると、火袋の文様が立体的な厚肉造りとはならないこと、火袋と中台の規模のバランス、中台のハツリ痕跡から推定される竿の幅、さらに宝珠の形状等は、近世でも新しい時期の特徴を示さない。ただし、古い時期の作品を模倣することも考えられるため、詳細な製作時期の特定は難しい。

燈籠石材の帶磁率は、第7表に示すとおり $0.01\sim0.07\times10^3$ SIである。石垣石材に多用される早月川花崗岩の値、 $5\sim9\times10^3$ SI〔長2015〕、 $6\sim10\times10^3$ SI〔古川2015〕とは一致せず、岩相も似ない。日本国内の花崗岩は、磁性の小さいチタン鉄鉱系花崗岩と、磁性の大きい磁鐵鉱系花崗岩に大別され、富山県は磁鐵鉱系花崗岩の地域に含まれる。帶磁率 5×10^3 SI以下はチタン鉄鉱系花崗岩に分類でき、



第65図 出土した六角型燈籠の復元図

瀬戸内地域に広く分布する〔先山2013〕。本燈籠の石材はチタン鉄鉱系花崗岩に属するもので、県外から持ち込まれた可能性がある。

ところで、富山城の北西約3kmにある富山藩主前田家墓所長岡御廟所の墓前燈籠・寄進燈籠に使われた花崗岩は、チタン鉄鉱系が大部分を占め、瀬戸内地域の花崗岩に似ることが指摘されている〔富山市教委埋セ2016〕。また、長秋雄氏は初代墓と二代墓の墓前燈籠に使われた石材について、より具体的に六甲地域の花崗岩と推定している〔長2017〕。これらの研究から、近世に瀬戸内地域から富山へ石材の流通ルートが存在したことが想定され、本燈籠も瀬戸内地域からの搬入を考えることができる。長秋雄氏に帶磁率と岩相写真を確認していただいたところ、岡山県瀬戸内市牛窓町の沖合に位置する前島の花崗岩に似るとのご教示をいただいた。前島は大坂城の石切丁場のひとつであり、大規模な花崗岩の露頭がある。これのみから断定はできないが、瀬戸内地域が産地である蓋然性は高いといえる。

なお、第47図石6の脚付型燈籠も同様の帶磁率と岩相を示す。六角型燈籠と同じ流通ルートにより持ち込まれたものと考えられる。

小 結 出土した石造物は、手水鉢、六角型燈籠、脚付型燈籠等を含み、庭園に置かれた石造物のセット関係を示しているように思われる。鉄石英の赤玉石2石も庭園景石に用いられたものと推測でき、これらは至近にあった三ノ丸の武家屋敷庭園に置かれていたものとみた。それらが廢城後、二階櫓御門石垣の石材と一緒に明治18年から25年の間に廃棄されたのであろう。いずれの石造物も破損が顕著であるのは、石造物として使用されなくなつてから、外堀への廃棄までの間、しばらく放置された状態にあったことを示す。

(野垣)

第4節 富山城三ノ丸南外堀出土の売薬行商鑑札について

(1) 売薬行商鑑札とは

明治時代に入ると、政府は西洋医学に基づく医療医薬の近代化を目指すため、明治10(1877)年1月に「売薬規則」を布告し、売薬商品への管理を強めるとともに、売薬営業税・鑑札料などの税を定めて漢方医学を根拠とする売薬業界への圧力を強めた〔県財団富山県民会館1998〕。同規則によれば、売薬業者は「売薬営業者」「請売者」「行商人」の3つに区分され、それぞれに鑑札を受けなければならなかつた〔富山県1987〕。同規則第7条には「売薬営業者及び請売者において、自ら行商し又は売子を派出して行商を為さしめんと欲するときは、そのよしを管轄庁へ届出、行商鑑札を願受け、行商する時は必ずこれを所持すべし」と定められており、管轄庁が発行し、「行商人」が所持していたものが売薬行商鑑札である。

木製の売薬行商鑑札は、富山県内では『富山県薬業史』〔富山県1987〕の中で明治13年石川県射水郡発行のものを見ることができる。

(2) 出土した売薬行商鑑札

出土した売薬行商鑑札の規格は縦10.65cm、横7.6cm、厚さ0.8cmであり、材質はヒノキである。規格について、明治10年3月に石川県令から布達された売薬営業に関する手続等の中で「売薬行商鑑札離形」として、「豎(縦)三寸五分(約10.6cm)」・「横貳寸五分(約7.57cm)」・「厚三分(約0.9cm)」・「用材檜」と記されており〔高岡高等商業学校1935〕、今回の売薬行商鑑札の規格・材質とほぼ合致する。表面には墨書、裏面には墨書と焼印がある。詳細については後述する。

(3) 出土鑑札に記されている文字

表面 8行の文字が記されている。右から1行目の「賣藥行商許可之證」および8行目の「右行商聞届候事」が売薬行商鑑札であることを示す。2~5行目にかけて売薬行商鑑札を受けた人物について書かれており、「小松清藏」がその人物に当たり、小松氏は富山県在住の平民であり、売薬営業者「中川雅由」の後見人「中川雅清」の売子であることが分かる。また、6~7行目にかけて小松氏が取り扱うことのできた薬の名称が9種類記されており、その名称は『富山売薬業史史料集』等でみることができる。薬の成分・効能については明確にはわからないが、6行目上方の「むしおさへ 蒼龍丸」、「はら薬 如神丸」は、薬の名称の横に添え書きがみられ、薬の効能を伺うことができる。また、7行目中ほどの「痘氣一貼湯」は、「痘氣」が下腹部の痛みの総称であることから、腹痛に効能がある振り出し薬ではないかと考えられる。

裏面 2行の文字が記され、中央に焼き印が捺してある。右端の「明治十六年十月廿三日」は鑑札の発行年月日であり、左端の号数は発行鑑札の通し番号であると思われる。中央には「上新川郡役所印」の焼印があり、上新川郡役所から発行されたことを示す。上新川郡は、明治11年に石川県新川郡が上・下2郡に分割されて成立し、同16年5月に富山県が設置されると、富山県の管轄となつた。上新川郡役所は、明治11年12月に石川県令の布達によって富山總曲輪(旧本丸御殿)に設けられ、富山県設置後の明治16年8月に富山山王町へ移転している〔富山大百科事典編集事務局1994〕。このことから、出土鑑札は富山県設置後の上新川郡役所から発行されたものといえる。

(4)まとめ

木製の売薬行商鑑札の発掘調査での出土は、富山県内では今回が初めてである。また、県内で確認できる木製の売薬行商鑑札は富山県設置以前のものであり、この鑑札が置県以後のものとして確認できる初めての例である。このことは、置県以後の売薬商人の姿を知ることができる貴重な発見である。

といえる。

出土鑑札に記される人物のうち、売子である「小林清藏」は、関係資料が見当たらないため詳細については不明である。売薬営業者である「中川雅由」は、明治19年の売薬税50円以上の営業者の一覧表にその名をみることができ、住所は「富山市旅籠町」となっている〔富山県1983〕。明治9年発行の古地図『新川縣下第十大区二小区新川郡富山旅籠町』(富山市立図書館蔵)を見ると、旅籠町に「中川」姓は一軒しかなく、「中川治平」の名を確認できる。「中川治平」と「中川雅由」・「中川雅清」が血縁関係にあるか等は不明であるが、何らかの関係性があると考えられる。

(宮田)

(表)



左：読み下し文、中：赤外線写真、右：実測図

(裏)



左：読み下し文、中：赤外線写真、右：実測図



第66図 売薬行商鑑札

参考文献(事実記載、総括)

- 愛知県史編纂委員会 2007 『愛知県史』別編 中世・近世 濱戸系 葉業 2
- 石川県金沢城調査研究所 2008 『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書I』
- 石川県金沢城調査研究所編 2009 『よみがえる金沢城2』 石川県教育委員会
- 石川県金沢城調査研究所 2012 『金沢城跡一二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門統櫓II一』
- 石川県金沢城調査研究所 2014 『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書II』
- 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』第65巻 史学研究会
- 江戸遺跡研究会編 1992 『江戸の食文化』 吉川弘文館
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房
- 越前慎子 1996 『梅原胡摩堂遺跡出土中世土器皿の編年』『梅原胡摩堂遺跡発掘報告書』
- 公益財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿陶磁研究会
- 鹿島昌也 2011 「富山市總曲輪遺跡出土の墨書き土器『宅持』について」『大境』第30号 富山考古学会
- 金沢市 2012 『金沢城下町遺跡(本多町三丁目地点)』
- 金沢城研究調査室 2006 『金沢城跡II』三ノ丸第1次調査
- 鐘方正樹 2003 『井戸の考古学』 同成社
- 京田良志 1970 『石燈籠新入門』 誠文堂新光社
- 久保智康 1999 『日本の美術史394号中世・近世の鏡』 至文堂
- 久保尚文 1983 『富山城の形成と神保氏』『越中中世史の研究』 桂書房
- 久保尚文 2014 『京都東岩藏寺と富山郷 一越中地域史研究の原点@一』『富山史壇』第174号 越中史壇会
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 財団法人富山県文化振興財団富山県民会館 1998 『富山の壳業文化と葉種商』
- 先山 徹 2013 『花崗岩の識別と帶磁率による産地同定』『御影石と中世の流通－石材識別と石造物の形態・分布－』 高志書院
- JACAR(アジア歴史資料センター) R e p. C 04017594400. 明治10年「太政官布告從1月至12月」
- 防衛省防衛研究所
- 定塚武敏 1974 「越中の焼きもの」『富山文庫』2 巧玄出版
- 瀬戸市史編纂委員会 1988 『瀬戸市史陶磁史編』2
- 瀬戸市史編纂委員会 1993 『瀬戸市史陶磁史編』5
- 瀬戸市史編纂委員会 1998 『瀬戸市史陶磁史編』6
- 総曲輪通り南地区市街地再開発組合・富山市教育委員会 2006 『富山城跡発掘調査報告書』
- 総曲輪四丁目・旅籠町地区開発協議会・富山市教育委員会 2010 『富山城跡発掘調査報告書』
- 高岡高等商業学校編 1935 『富山壳業史史料集』上巻
- 高瀬保編 1989 『富山町づくし』 桂書房
- 多治見市教育委員会 1993 『美濃菴の焼物』
- 長 秋雄 2015 『富山城石垣・高岡城石垣・金沢城石垣の帶磁率』『日本地質学会第122年学術大会講演要旨』 p192
- 長 秋雄 2016 『帶磁率ヒストグラムによる石垣石材の採石地同定』『号外地球』No.66 海洋出版
- 長 秋雄 2017 『岩相と帯磁率による「踏み石」の産地に関する考察』『富山城跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会
- 富山県 1983 『富山県葉業史』資料集成
- 富山県 1987 『富山県葉業史』通史
- 富山市 1987 『富山市史 通史上巻』
- 富山市 1987 『富山市史 通史下巻』
- 富山市教育委員会 2004 『富山城跡試掘確認調査報告書』
- 富山市教育委員会 2005 『富山城跡発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 2006a 『富山市金屋南遺跡発掘調査報告書III』
- 富山市教育委員会 2006b 『富山城跡試掘確認調査報告書』
- 富山市教育委員会 2007 『富山城跡試掘確認調査報告書』
- 富山市教育委員会 2008 『富山城跡試掘確認調査報告書』

- 富山市教育委員会 2009a 『富山市百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2009b 『富山城跡試掘確認調査報告書』
- 富山市教育委員会 2010 『富山城跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2014 『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2014 『平成26年度 富山城跡現地説明会資料』
- 富山市教育委員会 2015a 『千石町遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2015b 『富山城跡・富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2016 『富山城跡発掘調査報告書・城址公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』
- 富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2016 『富山藩主前田家墓所長岡御廟所石造物調査報告書』
- 富山市郷土博物館 2005 『富山城ものがたり』
- 富山市郷土博物館 2015 『特別展 都市「富山」の四〇〇年』
- 富山市上下水道局・富山市教育委員会 2012 『富山城跡発掘調査報告書』
- 富山市埋蔵文化財センター 2006 『富山の遺跡物語』No.7
- 富山市埋蔵文化財センター 2007 『富山の遺跡物語』No.8
- 富山市埋蔵文化財センター 2015a 『富山の遺跡物語』No.16
- 富山市埋蔵文化財センター 2015b 『富山城跡現地説明会資料』
- 富山市埋蔵文化財センター 2016 『富山の遺跡物語』No.17
- 富山市埋蔵文化財センター 2017 『富山の遺跡物語』No.18
- 富山市路面電車推進室・富山市教育委員会 2009 『富山城跡発掘調査報告書』
- 富山大百科事典編集事務局 1994 『富山大百科事典』上巻 北日本新聞社
- 中本八穂 2015 『富山城跡出土実包について』『富山市考古資料館紀要』第34号 富山市考古資料館
- 西町南地区市街地再開発組合・富山市教育委員会 2014 『富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』
- 布尾幸恵 2008 『石工具調査報告』『戸室石切丁場確認調査報告書Ⅰ』 石川県金沢城調査研究所
- 深井甚三 1995a 「要害に囲まれた富山城下」『城下町古地図散歩』 金沢・北陸の城下町』 平凡社
- 深井甚三 1995b 「近世城下町富山の建設・再建」『近世の地方都市と町人』 吉川弘文館
- 福建省博物館 『漳洲窯』『福建漳洲地区明清窯址調査発掘報告之一』 福建人民出版社
- 古川知明 2006 『慶長期富山城と城下町構造』『富山史壇』第150号 越中史壇会
- 古川知明 2007 『富山城の石垣修理－石積・石材の調査成果－』『第4回全国城跡等石垣整備調査研究会記録集』
- 第4回全国城跡等石垣整備調査研究会実行委員会
- 古川知明 2008a 『櫛御門新絵図』による富山城二ノ丸二階櫓門石垣の復元』『富山史壇』第156号 越中史壇会
- 古川知明 2008b 『富山市下大久保の矢穴石一中・近世割石技術の一例－』『富山市の遺跡物語』第9号
- 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 古川知明 2014 『富山城の縄張と城下町の構造』 桂書房
- 古川知明 2015 『岩石帶磁率による地域石材の分類(予察)』『富山市内石造物調査報告IV』
- 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 古川知明・小川幹太 2008 『富山城下町絵図の変遷と発掘調査による検証』『富山史壇』第155号 越中史壇会
- 古川知明・野垣好史・小林高太・蓮沼優介 2010 『富山藩主前田家墓所長岡御廟所基礎調査報告』
- 『富山市考古資料館紀要』第29号 富山市考古資料館
- 松永篤知 2015 『結桶組型井戸枠の下位構造と透水層の関係について』『富山城跡・富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』 富山市教育委員会
- 宮田進一 1988 『越中瀬戸の窯資料1』『大鏡』第12号 富山考古学学会
- 宮田進一 1998 『第4節 越中瀬戸の変遷と分布』『中・近世の北陸』 桂書房
- 矢守一彦 1979 『幕府へ提出の城下町絵図について』『待兼山論叢 日本書篇』第13号 大阪大学文学部
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
- 四柳嘉章 1991 『古代～近世漆器の変遷と塗装技術』『石川考古学研究会之誌』 第34号石川考古学研究会
- 四柳嘉章 1992 『北陸漆器研究の成果と課題』『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』 北陸中世土器研究会
- 四柳嘉章 2006 『漆』I、II 法政大学出版会